慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	奈良和重氏学位論文審査報告
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1975
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.48, No.4 (1975. 4) ,p.114- 116
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19750415-0114

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奈良和重氏学位論文審査報告

奈良和重氏の学位請求論文は、その主著である『理性と反抗—反時代的批判論集—』であるが、ほかに「法学研究」に発表した「工業化過程におけるマルクス主義の動態」ほか二点が参考論文としてつけられている。

『理性と反抗』は三部に分たれ、第一部はカール・ポパーのマルクス主義批判、第二部はラディカリズムの政治思想批判、および第三部は政治における反抗とヒューマニズムの問題を取り扱っており、附論としてピーター・ゲイの〈啓蒙の弁証法〉が書かれている。

奈良氏の業績の特徴は、新しい時代の政治思想に関する代表的文献を読んで、なにが問題になっているかの諸点を政治思想専攻の観点から検討していこうとするものである。

そして、とくにマルクス主義およびそれから派生してきた新左翼運動の思想に焦点をあわせ、一方これらの考え方に対立する立場の思想を紹介しながら奈良氏自身は後者の立場に共鳴をしているものと見受けられる。

そこで、まず第一部のカール・ポパーの歴史主義に対する批判およびそれに対立する考え方の紹介であるが、奈良氏はポパーの考え方に賛意を表しつつ、マルクス主義を批判し、それが科学的知識として確立されるためには、仮説的理論として謙虚な開かれた態度をとるべきだと主張していることである。そして、マルクス主義者がおかしている誤りは、歴史現象にあらわれてくる傾向を条件依存的なものではなく、絶対的傾向にしてしまうところにある、とする。

ついで、ポパー対コーンフォースの対決を紹介しながら、「個人の責任」こそポパーがつねに擁護してやまなかつたものであり、コンフォースの書物からポパーとマルクス、エンゲルスおよびレーニンのステレオタイプ化した言葉の羅列を引いてしまつたらそこになにが残るだろうか、と批判をしている。

つぎに、ポパーと比較して論ぜられているのはブライアン・マギーである。奈良氏は、このマギーの思想を紹介しながら、最後にマギーとポパーの対談をもつて両者を対比し、ポパーの「完全な社会への夢想は危険」であるという発言やピューリタンやロベスピエールもそうであつたが「彼らがなしとげたものは地上の天国ではなく暴力的タイラニーの地獄」であつたという言葉を引例している。

第二部においては、ラディカリズムの政治思想の批判を行い、近代イディオロギーの終焉が伝えられているにもかかわらず、近年アメリカ社会に新しいラディカリズムの考え方が抬頭しつつある状況を紹介しとくにヘルベルト・マルクーゼの美学＝政治理論に触れ、かれをもつてユートピア的・革命目的のためのプラクティスに理論的表現をあたえたものとしている。エンゲルスのいうユートピアから科学への道を、逆に科学からユートピアへと把握するマルクーゼ

の立場は「歴史の非決定性と超越的投企を強調する」ものであつて「体制否定の主体的意識の問題とあいまつて」かれのマルクス解釈の特徴であるとしている。

そして、マルクス主義とフロイトの考え方を結合しようとするマルクーゼの立場に説き及び、最後にこの政治理論は現実世界をこばむだけであると結論づけている。さらに、ドナルド・ディー・レインおよびセオドア・ロザックを取り上げ、かれらの提唱する反精神医学と対抗文化が政治における狂気のカーニバルといかにかかわるかの問題領域に検討を加えている。

第三部においては、とくにアルベール・カミュの反抗の政治思想を取り上げ、これとサルトルとの論争を問題化し、カミュの「反抗的人間」は、誠実に真正な人間の生き方がいかに政治的に行動するかをわれわれに示唆するものであるとしてこれを評価している。

ここで、奈良氏は、カミュの立場を忠実に紹介しながら絶対的なユートピア・イディオロギーの終末を告げるかれの立場に同調し、マルクス主義は科学的ではなく独断論的であつて、すべてか、無かという態度は人間性の否定となり、反抗の自己否定にほかならないとするその立場に共鳴する。そして、ポパーとカミュとの接近を論証し、マルクスの立場がつぎにくるとかれらが予想する社会の構成についてあまり関心がなく、むしろ、その達成にいたる手段のほうに力点をおいているとするクランストンの立場を引例する。

続いて、政治におけるヒューマニズムの問題として、カミュ対サルトル、サルトル対メルロ＝ポンティー、マルコビッチ対ペトロビッチを対比させ、スターリン主義との関連など取り上げ、コラコフスキーに触れ、最後にピーター・ゲイの啓蒙の弁証法について論じている。

要するに、奈良氏はポパーの歴史主義批判を問題提起の起点として、カミュの「反抗的人間」の思想に同調しながら、ヘーゲル主義者でもなく、マルクス主義者でもない自分の立場を「理性と反抗とは、両義的な哲学的思弁とか眩惑的な弁証法の飛翔とはまつたく無縁なコモン・センスである。そして、政治思想の領域において、ラディカルな衒奇性がモーデ・フィロゾフィであるとするならば、わたくしは、まさに時勢に逆行する『反時代的』人間であろう」と結論づけている。

奈良氏が自分自身をもつて「反時代的人間」であると規定することは別にして、同氏が最近の政治思想史の上に登場してきた諸思想を紹介し、自分の見解を「開かれた体系」、「呪縛からの解放」、「反証可能性の確認」、「啓蒙の批判精神の復活」などの主張のラインの上にのせていこうとする意図は明確に理解される。そして、最近の政治思想を解明したという意味において本論文は先駆的役割を果しているといえる。

確かに、文献の紹介は豊富かつ多彩ではあるが、奈良氏自身がこれらの見解に対してどう考えるかの自分自身の独自の主張をもつと詳細に展開して欲しかつたという憾みがある。つまり、文献の紹介に重点がおかれているために目標、表現が簡潔に、明快にいかない点が指摘できる。

要するに、最近の政治思想の文献を整理し、問題の所在を明らかにした点において、また、今後より積極的な思想形成のために、既成イディオロギーへの批判を徹底させたという意味で、法学博士の学位を授与するに足りるものと思われるし、同氏の各種外国文献の飜訳や参考論文の業績とあいまつて十分その学力のあるものと判断せられる。

昭和五十年二月十日

主査　慶應義塾大学教授法学博士　中村　菊男
副査　慶應義塾大学教授　白井　浩司
副査　慶應義塾大学教授法学博士　石井　良博

備考　本学位は、慶應義塾大学学位規程第四条によるものである。